

片倉鶴陵 医案③

富沢坊、富田尾伊右衛門、年六十八。呼吸短息、行歩すること能わず。治療一月余、効あらず。予を延いて診せしむ。脈洪大にして指を鼓す。余が曰く、「これ上盛下虚、虚陽浮散の脈」と。

即ち、戴復庵の論に従いて、局方の四柱湯（木香・茯苓・生姜・人参・附子・大棗）を以て、木香を半ば減じて、黄耆・山薬を加え、これを与えること三十日にして起居常の如し。然れども、脈猶いまだ和せず。彼、薬を厭うて止む。

後一月余。周身浮腫、気促喘急す。再び治を請う。予曰く、「高年喘後の腫、恐らくは起ちがたし」と辞す。病家強いて治を請う。因て壮元湯に桑白皮して飲食常の如し。是れ寛政九年のことなり。

此の病者、両度の大病、並びに全愈に至る者、予、自ら以て僥倖とす。何となれば、年七十に近くして、呼吸短息、脈指を鼓するは、是れ、虚陽外脱の悪候。多くは起ちがたし。今、其の症愈えて後、又水腫を發す。是れ亦脾腎虚乏より来たる所。共に皆不治の候に属す。

予が処する所のも、亦是れ正治にして他の変化なし。真に奇と云うべし。初学の者、若し前症わば、軽忽に見て剂を投ずべからず。総て気促して後に腫を見わすは、死に至る者多しと知るべし。